

三朝高僧伝攷

——訳経篇にみる役職名について——

滋 賀 高 義

(一)

1 (滋賀)

インド文化圏に起った仏教が、生死を顧みることなき弘法の念に燃えた宣教師達により、極寒のバミール高原をこえ、灼熱のタクラマカン砂漠をわたり、東方の中国文化圏に伝来されて、すでに二千年になんたとするのである。そして伝来初期の口伝仏教から翻訳時代へと進み、ついに隋・唐時代にみられるような、隆盛期を迎えるに至ったことは、多くの研究者によって紹介されているところであり、その間にあって多くの仏教徒が、それぞれの立場において活躍したことも、中国の史書に記録され、現存しているところである。

本稿においては、口伝仏教から翻訳時代に移行した時——文書伝道の時代に入った時——に活躍した訳経僧達が、どのような方法（工程）によって、梵文経典を漢文経典へと写し換えていったのかを、『三朝高僧伝』（梁高僧伝・唐高僧伝・宋高僧伝）の訳経篇を中心として眺めていくこととする。もっとも、訳経方法については、一九五七年に李思純氏が、その著書『江村十論』の中で、「訳経工序考」と題されて、相当に詳しく論述されている。一九五七年といえば、私が大学院生の頃であり、この論文によって大いに啓蒙を受けたのであるが、ただいまひとつ納得するところまでに至らなかった。もっとも、浅学なるがゆえのものであったことは、弁解するまでもないことであるが、それにし

ても、

……隋唐以前訳経の情況、大約為(一)趨向多人合訳、如華嚴前分の訳出、参加的有百余人。(二)宣梵文与証梵義皆為梵僧、或分工或不分工。録漢語与校正文句皆為漢人、也是或分工或不分工、(三)口訳梵文為漢語の人、則為梵僧或漢人、而以漢人為較多。……

と述べていられる点や、

……唐代訳経人数、不如晋宋南北朝之多、但成績却遠勝過前代。所以能如此的原因、(一)由中国僧侶自訳、不必仰求梵僧、(二)由訳経的都是仏学大師、(三)由社会秩序的安定与繁栄、経済与文化的発展、故人数雖少、成績却大。……

と主張していられるところなどに、若干の疑問が残ったがゆえでもある。

ともかくも、先学の論考に導びかれつつ、いま一度、愚考をかさねることとしたのである。

(二)

宋の太宗の太平興国七年(九八二)六月に、国家事業としての仏教經典訳経の場である訳経院が、太平興国寺の西に完成しているのであって、当時、中インドより来朝し太宗

に重用されていた天息災が、ここに住居をあたえられ、訳経活動に入ったことが知られるのである。その訳経方法について李思純氏は、『仏祖統紀』巻第四十三の記録をもつて紹介していられるが、そこには、

第一訳主。正坐面外。宣伝梵文。

第二証義。坐其左。与訳主評量梵文。

第三証文。坐其右。聴訳主高説梵文。以驗差誤。

第四書写。梵学僧審聴梵文。書成華字。猶是梵音。

第五筆受。翻梵音成華言。

第六綴文。回綴文字。使成句義。

第七参訳。参考兩土文字。使無誤。

第八刊定。刊削冗長。定取句義。

第九潤文。官於僧衆。南向設位。参詳潤色。

とあるように、この時代には整然とした訳場列位が完成されていたのである。すなわち、訳主が梵文經典を誦誦する際に疑問点の相談をする証義と、訳主と經典との間に生ずる誤りを指摘する証文とが、訳主の左右に着座するのであり、訳主が発声した梵音と、同じ漢音の文字を機械的に筆写する書写、ついで筆写された漢音をもとに漢語を完成する筆受、筆写の順に羅列された漢語を文章として完成する綴文、梵文と漢文とを読みあわして両文の間の錯誤を調査

する参訳。余計な文章を削除して完全な文章とする刊定、堅くて読みづらい文章に、うるおいを持たして美しい經典に仕上げる潤文、という役職が設けられていたのであり、なかでも潤文は「南向設位」の文字でも理解できるように、天子の名代としての地位にあって、諸僧を監督する立場でもあったことが知られるのである。

それでは、このような役職がいつの頃から定まって来たのであろうか。李思純氏は、

……。我門不但由此知道宋代訳経院の情形、也可以由此推知隋唐翻経館の概況、大体与宋代相同。因為宋代の制度、並非創始、還是仿行隋唐旧制的。……

と述べ、隋・唐時代の翻経館の概況は推測しがたいが、宋代の訳経院の原形が隋・唐の制度を模倣していると思われるから、大体において宋代と同じであった。という意見である。これは註①に引用した『釈氏稽古略』巻第四の、詔して訳経伝法院を東京太平興国寺の西に立つ。唐の故事に如う。……と記録されていることによっても、肯首できるところである。

神田喜一郎博士は「繙流二天小学家——智纂と玄応」^③の論文中に、玄応が字学の大徳として玄奘の推挙を受け、

勅命によって玄奘の訳場に召し出されたことを述べられ、玄応が当時における小学の一大權威者である証明として、弘福寺と大慈恩寺の翻経院における訳場列位を四例あげていられる。すなわち、

『大菩薩藏経』巻第二十（貞観十九年）

『瑜伽師地論』巻第一百（貞観廿二年）

『大乘大集地藏十輪経』巻第一（永徽二年）

『大毘婆沙論』巻第一（顕慶元年）

に記録されているものであるが、そこには(一)訳主 (二)証義 (三)証文 (四)正字 (五)筆受 (六)綴文 (七)証梵文・証梵語 (八)執筆 (九)監閲の役職名が見出される。これをさきの『仏祖統紀』巻第四十三の記録と、李思純氏の研究による別称名とで照合すると、(七)の証梵文と証梵語とは第三の証文でなくしてはならない。『大菩薩藏経』には、証文の役職名がないところより、あるいは貞観十九年（六四五）には、証梵文が証文の別称であったことになる。ところが三年後の貞観廿二年（六四八）に訳出された『瑜伽師地論』では、証文とは別に証梵語の役職名が並記されているのである。しかも『大菩薩藏経』では、

大興善寺沙門玄謨証梵文とあり、『瑜伽師地論』では、

弘福寺沙門玄謨証梵語

と記録されていて、寺名こそ違え証梵文と証梵語とは、玄謨なる僧侶が関係した役職名なのである。また『大毘婆沙論』でも、執筆と筆受とが並列されているのである。この両經の用例のみを考えると、あたかも証文と証梵語・執筆と筆受とは、異なった役職ということになるのであるが、李思純氏によれば執筆は筆受の別称ということであるから、役職名は訳經時において適宜に使用されていたとも考えられるのである。しかし勅命により官設の翻經院において、梵本に忠実な翻訳をしていた玄奘が、「証文・正字・証梵語」「正字・就筆・筆受」の順序で記名させているのであって、証文と証梵語ならびに執筆と筆受が同一の役職名であることを認めていたと、簡単に考えてもよいのであろうか。

(三)

三朝高僧伝のなかで最初に慧皎によって編纂された『梁高僧伝』十四卷には、正伝二五七名・付伝二四三名の高僧の伝記が納められているが、經典翻訳者を収録した卷一・卷二・卷三の訳經篇には、正伝三五名・付伝二八名の記録がある。そのうち十九名の伝記から、さきに述べた訳經方

法の役職名が見出されるのであって、すこしく煩瑣で、かつ漢字の羅列にもなるが、その部分を抄録して若干の考察を試みることにする。

時有天竺沙門竺仏朔。……朔又以光和二年。於雒陽出般若三昧。識為伝言。河南雒陽孟福張蓮筆受。^④

時又有優婆塞安玄。安息国人。……玄与沙門蔽仏調共出法鏡經。玄口訳梵文。仏調筆受。^⑤

至晋惠之末。有沙門法立。更訳為五卷。沙門法巨著筆。其辞味小華也。^⑥

時有清信士聶承遠。明解有才。篤志務法。護公出經。多參正文句。超日明經初訳。頗多煩重。承遠刪正。得今行二卷。其所詳定類皆如此。

又有竺法首陳士倫孫伯虎虞世雅等。皆共承護旨執筆詳校。^⑧

僧伽跋澄。此云衆現。罽賓人。……符堅秘書郎趙正。崇仰大法。嘗聞外国宗習阿毘曇毘婆沙而跋澄諷誦。乃

四事礼供。請訳梵文。遂共名徳法師积道安等。集僧宣
 訳。跋澄口誦經本。外国沙門曇摩難提筆受為梵文。仏
 図羅刹宣訳。秦沙門敏智筆受為晋本。……

この僧伽跋澄伝によって、翻訳初期の方法を知ることが出
 来るのである。それまでにあげた五例では、伝言・著筆・
 刪正・執筆・詳校などの役職があるのみで、ただ安玄伝の
 み、「玄は梵文を口訳し、仏調は筆受す。」とあったのであ
 るが、ここでは僧伽跋澄が暗記している梵文を口誦するの
 を、曇摩難提が筆受して梵文經典に復元しているものであり、
 仏図羅刹がこの梵経を漢訳し、敏智が筆受して漢文經典と
 しているのである。すなわち口伝 → 梵本復元 → 漢訳
 (口訳) → 漢本、という方法によったことが知られるので
 ある。このことは先の五例のなかで、「護公出経」「出般舟
 三昧」「出法鏡経」と記載されている出字が、漢訳を意味す
 るものではなく、暗記もしくは口伝されていた経文を、梵
 本として復元したものと解釈することが可能となるのであ
 る。ついで僧伽跋澄伝には、

……跋澄乃与曇摩難提及僧伽提婆三人共執梵本。秦
 沙門仏念宣訳。慧嵩筆受。安公法和対共校定。……¹⁰

とあって、伝来された梵本を執りて、誦誦したのが僧伽跋
 澄ほか二名であり、それを漢訳したのが、中国僧の仏念と

いうことになるのである。

曇摩難提。此云法喜。兜佉勒人。……以符氏建元中
 至于長安。……堅臣武威太守趙正欲請出経。……
 乃請安公等。於長安城中。集義学僧。請難提訳出中増
 一二阿含並先所出毘曇心三法度等凡一百六卷。仏念伝。
 訳。慧嵩筆受。……¹¹

僧伽提婆。此言衆天。……罽賓人。……置請入廬岳。
 以晋太元之中。請出阿毘曇心及三法度等。提婆乃於般
 若台。手執梵文。口宣晋語。去華存実。務尽義本。
 ……至隆安元年。来遊京師。……其年冬。珣集京
 都義学沙門积慧持等四十余人。更請提婆。重訳中阿含
 等。罽賓沙門僧伽羅叉執梵本。提婆翻為晋言。……¹²

竺仏念。涼州人。弱年出家。志業清堅。外和内朗。有
 通敏之鑒。諷習衆経。粗涉外典。其蒼雅詰訓。尤所明
 達。少好遊方。備貫風俗。家世西河洞曉方語。華戒音
 義。莫不兼积。故義学之誉雖闕。洽聞之声甚著。符氏
 建元中。……於是澄執梵文。念积為晋。質断疑義。
 音字方明。……自世高支謙以後。莫踰於念。在符姚
 二代。為訳人之宗。……¹³

この竺仏念こそ、僧伽跋澄伝に「秦の沙門仏念宣訳」、曇摩難提伝にも「仏念伝訳」と記載されている涼州出身の僧侶であつて、内典・外典を理解し、華・戒の音義にも深く通曉していた人であり、前秦・後秦の二代にわたつて「訳人の宗」と尊敬された人物なのである。つぎに、

曇摩耶舎。此云法明。罽賓人。……會有天竺沙門曇摩掘多。來入闕中。同氣相求宛然若旧。因共耶舎訳舎利弗阿毘曇。以偽秦弘始九年。初書梵文。至十六年翻訳方竟。……¹⁴

仏陀耶舎。此云覚明。罽賓人。……即以弘始十二年。訳出四分律凡四十四卷。並出長阿舎等。涼州沙門竺仏念訳。為秦言。道舎筆受。至十五年解座。……名徳沙門五百人皆重輿施。……¹⁵

仏駄跋陀羅。此云覚賢。本姓釈氏。迦維羅衛人。……到義熙十四年。吳郡内史孟顓右衛將軍褚叔度。即請賢為訳匠。乃手執梵文。共沙門法業慧義慧嚴等百有余人。於道場訳出。詮定文旨。會通華戎。妙得経意。故道場寺猶有華嚴堂焉。又沙門法頭。於西域所得僧祇律梵本。復請賢訳為晋文。……¹⁶

曇無讖。……其本中天竺人。……讖以未参土言又無伝訳。恐言舛於理。不許即翻。於是学語三年。方訳写初分十卷。時沙門慧嵩道朗独歩河西。值其宣出経蔵。深相推重。転易梵文。嵩公筆受。……¹⁷

仏駄什。此云覚寿。罽賓人。……以其年(景平元年)冬十一月。集于龍光寺。訳為三十四卷。稱為五分律。什執梵文。于闐沙門智勝為訳。龍光道生東安慧嚴共執筆参正。……¹⁸

浮陀跋摩。此云覚鑑。西域人。……即宋元嘉十四年。於涼州城内闕予宮中。請跋摩訳焉。泰即筆受。沙門慧嵩道朗与義学僧三百余人。考正文義。再周方訖。凡一百卷。……¹⁹

僧伽跋摩。此云衆鑑。天竺人也。……即以其年(元嘉十年)九月。於長干寺招集学士。更請出焉。宝雲訳語。観自筆受。考覈研校一周乃訖。……²⁰

璽良耶舎。此云時称。西域人。……沙門僧含請訳菓王菓上観及無量寿観。含即筆受。……²¹

求那跋陀羅。此云功德賢。中天竺人。……後於丹陽郡。訳出勝鬘楞伽經。徒衆七百余。宝雲伝。慧観執筆。往復諮析。妙得本旨。……常令弟子法勇伝。訳度語。……

梁初有僧伽婆羅者。亦外国学僧。……勅於正観寺及寿光殿占雲館中。訳出大阿育王経解脱道論等。釈宝唱・袁曇允等筆受。……

と記録されていることで理解出来るように、

① 口伝 → 梵本完成 → 漢訳 → 漢本完成

② 将来梵本 → 漢訳 → 漢本完成

という二種類の翻訳方法があったことが知られるのであって、①は訳経者自身の暗記している經典を、中国において梵語經典として復元し、これを漢訳經典にするものであり、②は将来されている梵語經典を、訳経者が読誦して漢訳經典とするものである。しかも②の工程では、梵本読誦と漢訳とを訳経者が一人でおこなう場合と、梵本読誦と漢訳とをそれぞれ別人がおこなう場合とがあり、前者は僧伽提婆伝の「手に梵本を執り、口に晋語を宣ぶ。」や、浮陀跋摩伝の「跋摩に請いて焉を訳す。泰は即ち筆受す。」の記録により、後者は僧伽提婆伝の「闍賓沙門の僧伽羅又は梵本を

執り、提婆は翻して晋言と為す。」や、仏駄什伝の「什は梵文を執り、于闍沙門の智勝は訳を為す。」の記録によって知られるのである。

さらにこれらの記録中には、宋代に完成された訳場列位の役職名が、ほとんどのないのであって、「書字」に該当する漢訳者と、「筆受」の役職者の記録のみを見ることが出来るのである。しかもここでの筆受は「梵音を翻して、華言と成す。」だけの職務ではなく、僧伽跋澄伝にもあるように口誦された経文を、梵文經典に復元する職務の者を、同様に筆受と呼んでいたことが知られるのである。もっとも「参正文句」「刪正」「詳校」「対共校定」の各語句より、いわゆる参訳などに相当する役職者が、存在していたことが窺知されるのである。

つぎに李思純氏が「隋唐以前の訳経の情況は、おおむねの傾向として多人数で合訳していることで、華嚴前分の訳出の如きは、参加者が百余人もあった。」と述べていられる点であるが、訳経篇を見る限りにおいて、訳経に参加した人数を記録しているのは、さきの僧伽提婆伝に「其年冬。珣集京都義学沙門积慧持等四十余人。」と記録している四十余名と、鳩摩羅什伝の

……。訳出衆経。什既率多語誦無不究尽。転能漢言音

詠流便。既覽旧経義多紕繆。皆由先訳失旨不与梵本相應。於是與使沙門僧習僧遷法欽道流道恒道標僧敎僧肇等八百余人。詒受什旨。更令出大品。……^②

に見られる八百余名。それに仏陀耶舎伝の「名徳沙門五百人。皆重賤施。」にある五百名。さらに李思純氏が指摘していられるように、仏駄跋陀羅が支法領によって于闐より將來していた『華嚴経』の前文の三万六千偈を、呉郡内史の孟顛と右衛將軍の褚叔度の要請により、義熙十四年（四一八）に道場寺で訳出した際の記録に残る百余名。さらに浮陀跋摩が北涼の哀主（沮渠牧健）の願いによって、永和五年（四三七）に涼州城内の閑予宮で、『阿毘曇毘婆沙論』を訳出した時の三百余名。また求那跋陀羅が丹陽郡において、『勝鬘経』『楞伽経』を訳出した記録に見られる「徒衆七百余名。」の七百余名のみである。すなわち六三名のうち六名の記録に参加人数が残されているのである。しかも仏陀耶舎の場合は、訳場解座の時に於ける慰勞金給付の人数であり、一經典訳出に参加した人数ではないのである。

このことは鳩摩羅什の場合も、姚興に国師の礼をもつて待遇され、西明閣や逍遙園で經典訳出をおこなった時、「訳出衆経。」と記録されているのであって、一經典の訳出ではないのである。鳩摩羅什が逍遙園において『大品般

若経』を訳出した時の情景を、諏訪義純氏は僧叡の「大品経序」^③によって「されば、羅什をはじめとする僧侶・貴族たち五百余人は、一日一夜の八齋戒を持して訳訳を開始し校正し、その終了の日を迎えたものであろう。」と述べていられるのである。この時の訳場には後秦の姚興が臨席し、旧経を手にしたとも記録にあるが、このことを国王自身が仏教を尊崇し、訳訳は国家事業としての実施であり、それを国民に知らしむるための儀式であったと考えれば、実際に五百余名が終始『大品経』訳訳に、関係した人数とは断言できないのであって、むしろ国王とともに儀式に参列した人々が、多数あったとみるべきではなからうか。

また求那跋陀羅伝にみられる「徒衆七百人。」であるが、慧観の「勝鬘経序」^④には、

……請外国沙門求那跋陀羅。手執正本口宣梵音。由居苦節通悟息心。釈宝雲訳為宋語。德行諸僧慧嚴等一百余人。考音詳義。以定厥文。……

と記録されていて、参加人数に大きな相違が知られるのである。しかも「考音詳義」の語句があり、訳場列位にみられる筆受・証義的な役割のあったことが考えられるのである。このことは浮陀跋摩伝でも同様のことがいえるのであって、「考正文義。再周方訖。」の記録であり、筆受・証義

に加えて参訳に似た役職が窺知できるのである。このように見てくると仏駄跋陀羅伝でも、「詮定文旨。会通華戎。」の記録の意味が、判然としてくるのであって、宋代の訳場列位のように役職分類の名称はなくても、訳場における職務分担ができていたのである。

李思純氏の主張される「合訳」の意味について、いまひとつ理解できないが、これを前述したように口述者・梵本完成者・漢訳者・漢本完成者のグループと、考えても多人数とはいえないのであり、また多人数で構成された訳場と解釈しても、後述するように隋唐以前の特色とはいえないのである。ともかくも例証としてあげられた仏駄跋陀羅の華嚴経訳出における参加者百余名には、訳場における職務分担が存在したことが理解できるのである。

これまで述べてきたように『梁高僧伝』の訳経篇には、伝言・筆受・著筆・執筆・刪正・詳校・詳義の語句が記録されていたのであり、このうち筆受・執筆・刪正・詳校・詳義についてはさきにふれたが、伝言は李氏によれば書字の別称ということになり、著筆については「沙門法巨著筆。其辞味小華也。」の文章より、筆受的役割であったものと推測するのである。

(四)

『唐高僧伝』は道宣によって撰せられた、三十巻よりなる高僧の伝記であり、訳経篇には正伝十五名・付伝三四名の記録がある。そのうち訳経者の役職名が記載されている伝記は十四名であるが、「梁揚都正観寺扶南国沙門僧伽婆羅伝一」は、『梁高僧伝』卷三の求那毘地伝の付伝の僧侶と同一人物である。ただここでは「初めて経を翻ずるの日、寿光殿において武帝は躬から法座に臨み、其文を筆受す。然る後に乃ち訳人に付して其経本を尽す。」とあって、梁の武帝自身が筆受をしているのであり、鳩摩羅什伝の姚興自身が訳場に臨席した儀式形態が、受けつがれているのである。ともかくも十四名中六名の伝記には、筆受の職務のみが記録されているだけであり、六世紀の半ば頃までは役職名が判然としていなかったことが知られる。ただ月婆首那伝には、

時中天竺優禪尼国王子月婆首那。陳言高空。……
至陳天嘉乙酉之歲。始於江州興業寺訳之。沙門智昕筆受。陳文。凡六十日。覆疎陶練。勘閱俱了。江州刺史黃法耗為檀越。僧正積惠恭監掌。……^②

とあって、筆受のほかには覆疎・陶練・勘閱・監掌の語句が

見られるが、監掌は別として他は役職名とはいいがたいのである。

監掌については那連提黎耶舍伝に、

……。又勅昭玄大統沙門法上等二十余人。監掌。翻訳。
沙門法智居士万天懿伝語。……。

とあり、おなじく開皇九年（五八九）に、百歳の長寿で他界した耶舍の伝末に、

……。凡前後所訳経論。一十五部。八十余卷。即菩薩見実月藏日藏法勝毘曇等是也。並沙門僧琛明芬共事李道宝等度語筆受。昭玄統沙門曇延昭玄都沙門靈藏等二十余僧。監護始末。至五年冬。勸練俱了。並沙門彦琮製序。……。

と記録されており、当時の仏教官僚ともいえる法上・曇延などが監督の立場にあったのであり、宋代訳場列位の潤文にあたる職務が、監掌もしくは監護であったことが知られるのである。しかも「勸練俱了。」の文章は、あきらかに月婆首那伝の「……陶練勸閱俱了。」に相当するものであり、闍那崛多伝には、

……。爾時耶舍已亡。専当元匠。於大興善更召婆羅門僧達摩笈多。並勅居士高天奴高和仁兄弟等。同伝梵語。

又置十大德沙門僧休法柔法経慧藏洪遵慧遠法纂僧暉明

穆曇遷等。監掌翻事。銓定宗旨。沙門明穆彦琮。重对梵本。再審覆勘。整理文義。……。

とあって、翻訳後に再度梵本と対校し、經典内容の審議もおこない文義を整理する、いわゆる綴文・参訳的な仕事を、明穆と彦琮の二僧が担当しているのである。ここにいう彦琮については、いまだら愚論を記すまでもないが、六世紀後半から七世紀初めにかけて、經典翻訳はいうにおよばず、当時の知識階級における第一級の英僧であり、内にあっては『弁正論』を著して、翻訳に関する心得を後世に示した人である^③。その彦琮が梵漢經典の対校をなし文義を整えたのである。しかしこのような職務もさることながら、『唐高僧伝』には翻訳經典の序文を製した記録が散見するのである。翻訳經典の序文については、ことさらに目新しいことではなく、『出三藏記集』には卷六から卷十一にかけて、多くの序文が記載されているのであるが、訳経篇にあっては、彦琮の製序の頃より訳場列位の最後のところに、記録されるようになったものと思われるのである。

宋代の訳場列位に定める証義・綴文・刊定などの語句が、役職名として使われるのは唐の太宗の時代からであり、波羅頗迦羅蜜多羅の記録中に、

……。至（貞觀）三年三月。……。下語所司。搜揚碩德

備經三教者一十九人。於大興善創開伝訳。沙門慧乘等証義。沙門玄謨等訳語。沙門慧蹟慧浄慧明法琳等綴文。又勅上柱国尚書左僕射房玄齡。散騎常侍太子詹事杜正倫。參助銓定。光録大夫太府卿蕭瑒。総知監護。……。至六年冬。勘閲既周。繕写云畢。所司詳読乃上聞奏。下勅各写十部散流海内。……。又勅太子庶子李百藥制序。具如論首。……。

と記されているところである。訳語・銓定はそれぞれ書字・判定に相当するとしても、参助を参訳とするのには若干の抵抗があり、むしろ勘閲の語句に参訳的な役割が、含まれているのではないかと考えるのである。七世紀も半ばになると、唐の代表的訳経者玄奘の活躍が始まるのであるが、翻経院における役職名の記載は、神田博士が引用されているところだけである。すなわち、

……遂召沙門慧明靈閣等。以為証義。沙門行友玄蹟等。以為綴緝。沙門智証弁機等。以為録文。沙門玄模以証梵語。沙門玄応以定字偽。其年五月創開翻訳。大菩薩藏經二十卷。余為執筆。並刪綴詞理。……。又復旁翻顯揚聖教論二十卷。智証等更迭録文。沙門行友詳理文句。奘公於論重加陶練。次又翻大乘対法論一十五卷。沙門玄蹟筆受。……。

の記録であり、『大菩薩藏經』の翻訳時には、証義・綴緝・録文・証梵語・定字偽・執筆・刪綴詞理の職務が存在していたのである。しかし神田論文の『大菩薩藏經』の訳場列位と照合するに、『唐高僧伝』と重複する沙門名より、綴緝と録文は綴文の職務であり、定字偽は正字であって、いわゆる書字の役職となる。また証梵語は参訳に相当するところが判明し、しかも神田論文引用の四例によって、綴文の記録のある時には証文がなく、証文ある時には綴文がない点より、綴文と証文が同一職務であることが知られるのである。すなわち玄奘の訳経院にあっては、この当時おおまかな職務分担はあっても、さだめられた役職名はなかったものと考えられるのである。

(五)

宋の仏教史家贊寧によって撰集された『宋高僧伝』三十卷の内、訳経篇三卷には正伝三二名・付伝十二名の記録があり、この四四名の伝記で訳経場における役職名が、記録されているのは十八名である。その第一に記載されているのが、玄奘の高風を慕いて二五年の歳月をかけ、インド求法の旅より帰った義浄の業績である。まず久視元年(七〇〇)から長安三年(七〇三)にかけて、『金光明最勝王經』な

ど凡そ二十部を翻訳した際の記録には、

……北印度沙門阿彌真那証梵文義。沙門波耨復礼慧表智積等筆受証文。沙門法宝法藏德感勝莊神英仁亮大儀慈訓等証義。成均太学助教許觀監護。繕寫進呈。天后製聖教序。……^⑤

とあり、ついで『孔雀王經』など四部を、中宗の神龍元年(七〇五)に翻訳した時の、

……沙門盤度誦梵文。沙門玄傘筆受。沙門大儀証文。沙門勝莊利貞証義。兵部侍郎崔湜給事中盧祭潤文正字。秘書監尉馬都尉楊慎交監護。帝深崇積典。特抽觀思製大唐龍興三藏聖教序。……^⑥

という記録と、睿宗の唐隆元年(七一〇)に、『浴像功德經』など二十部におよぶ翻訳の記録には、

……吐火羅沙門達磨末磨。中印度沙門拔弩証梵義。罽賓沙門達磨難陀証梵文。居士東印度首領伊舍羅証梵本。沙門慧積居士中印度李积迦度頗多語梵本。沙門文綱慧沼利貞勝莊愛同思恒証義。玄傘智積筆受。居士東印度瞿曇金剛迦湿弥羅國王子阿順証。修文館大学士李嶠。兵部尚書韋嗣立中書侍郎趙彦昭。吏部侍郎盧藏用兵部侍郎張說中書舍人李又二十余人。次文潤色。左僕射韋巨源右僕射蘇瓌監護。秘書大監嗣虢王邕同監護。

……^⑦

とあって、証訳を参訳と解釈すれば、これまでに検討してきた役職名が、刊定の職務以外はすべて見出せるのである。すなわち八世紀の初め、義浄の訳経場において訳場列位の役職名が定着したと思われるのである。しかも義浄の晩年に近い唐隆元年の訳経においては、これまでに見られない多くの外国沙門や、居士達の参加が記録されており、かりに義浄が不在であっても翻訳遂行は、可能であったと思われるのである。そして外国人を訳経事業のアシスタントとして登用する傾向は、こののちも、

……(開元)十一年。奉勅於資聖寺。翻出瑜伽念誦法二卷七俱胝陀羅尼二卷。東印度婆羅門大首領直中書伊舍羅訳語。嵩岳沙門温古筆受……^⑧

……(貞元)八年。上表拳慧翻伝。有勅令京城諸寺大德名業殊衆者同訳。得罽賓三藏般若開訳梵本。……^⑨

……先天二年四月八日進内。此訳場中沙門思忠天竺大首領伊舍羅等訳梵文。天竺沙門波若屈多沙門達摩証梵義。……^⑩

……。至(貞元)十二年六月。詔於崇福寺翻訳。厨賓沙門般若宣梵文。……^③
とつづくのであり、不空伝には、

……。起于天宝迄今大曆六年。凡一百二十余卷七十七部。并目錄及筆受等僧俗名字兼。略出念誦儀軌写畢週誕節。謹具進上。……^④

とあって、訳経事業にかかわった僧侶・俗人の姓名を、唐の代宗の生誕日に進上しているのであり、唐代の訳経も中国の僧侶のみでおこなわれたものではないことがわかるのである。

訳経篇の最後に贊寧は、

……。或曰。訳場経館設官分職。不得聞乎。曰此務所司。先宗訳主。即齋葉書之三藏明練頭密二教者充之。次則筆受者。必言通華梵字綜有空。相問委知然後下筆。……。又謂為綴文。次則度語者。正云訳語也。伝度転令生解。亦名伝語。……。次則証梵本者。求其量果密能証知。能詮不差所頭無謬矣。……。至有立証。梵義一員。乃明西義得失。貴令華語下不失梵義也。復立証。禪義一員。……。次則潤文一位。員数不恒。令通内外学者充之。……。次則証義。蓋証已訳之文所詮之義也。……。次則梵唄。法筵肇啓梵唄前興。用作先容令生物善。

唐永泰中方聞此位也。次則校勘。懺対已訳之文。……。次則監護大使。……。監掌訳訳事。詮定宗旨。……。又置正字。……。後或置或否。……^⑤

と、訳場における役職名と職務についての解説をしているが、筆受と綴文を同一職とし、正字については神田論文に採りあげられた、玄応の名前をあげるにとどめているのである。ついで、贊寧は太平興国七年に設置された訳経院の役職名を紹介しているが、ここでは綴文を筆受と異なる役職名としているものの、書字および刊定には言及していないのである。

これまで論じてきた訳経方法(工程)における役職名は、国家事業としての訳経と、仏教弘通の念に燃える伝道者個人の訳経とを、区別することなく眺めたものであって、多くの錯誤を犯していることと思うのである。国家の財源に支えられ、多くの協力者とともにおこなう訳場と、個人のささやかな訳場とでは、職務分担もおのずから違ってくるのであり、後者においては一人で複数の職務を担当することとは当然なことであって、その役職名のすべてが記録されたとは限らないのである。ましてや仏典訳訳の当初に、職務と名称が規定されていない現実にあつて、記録する人々がさまざまな名称を使い、後世に伝えたのである。これを

分析して形式化することは至難のことであり、名僧贊寧に
おいても前述のごとき混乱が生じるのであって、すでに仏
教經典の多くが翻訳されてしまったのちの宋代に、『仏祖
統紀』に見られる訳場列位が完備されたことは、歴史の皮
肉とでもいふべきであろうか。

註

- ① ○『宋史』卷四、(太平興國七年)六月丙子。置訳経院。
- 『仏祖統紀』卷第四十三、(太平興國七年)六月訳経院成。
詔天息災等居之。……
- 李思純氏は「訳経工序考」において、太平興國二年に訳経
院が建てられたとしていられる。
- 『釈氏稽古略』卷第四、壬午太平興國七年。……。詔立訳
経伝法院於東京太平興國寺之西。如唐故事。……
- ② 「訳経工序考」参照
- ③ 『神田喜一郎全集』所集
- ④ ⑤ 『高僧伝』卷一、支婁迦讖伝の付伝
- ⑥ 『高僧伝』卷一、維祇難伝の付伝
- ⑦ ⑧ 『高僧伝』卷一、竺曇摩羅刹伝の付伝
- ⑨ ⑩ 『高僧伝』卷一、僧伽跋澄伝
- ⑪ 『高僧伝』卷一、曇摩難提伝
- ⑫ 『高僧伝』卷一、僧伽提婆伝
- ⑬ 『高僧伝』卷一、竺仏念伝
- ⑭ 『高僧伝』卷一、曇摩耶舍伝

- ⑮ 『高僧伝』卷二、仏陀耶舍伝
- ⑯ 『高僧伝』卷二、仏駄跋陀羅伝
- ⑰ 『高僧伝』卷二、曇無讖伝
- ⑱ 『高僧伝』卷三、仏駄什伝
- ⑲ 『高僧伝』卷三、浮陀跋摩伝
- ⑳ 『高僧伝』卷三、僧伽跋摩伝
- ㉑ 『高僧伝』卷三、曇良耶舍伝
- ㉒ 『高僧伝』卷三、求那跋陀羅伝
- ㉓ 『高僧伝』卷三、求那毘地伝の付伝
- ㉔ 『高僧伝』卷二、鳩摩羅什伝
- ㉕ 『出三蔵記集』卷八、
- ㉖ 『羅什』横超慧日・諏訪義純共著、(大蔵出版株式会社)
223ページ参照
- ㉗ 『出三蔵記集』卷九、『仏書解説大辞典』第一部第四章(大
東出版社)
- ㉘ 『唐高僧伝』卷一、僧伽婆羅・菩提流支・般若流支・撰那
跋陀羅・闍那耶舍・法泰の各伝。ただし菩提流支伝には、伝
本参助の語句がある。
- ㉙ 『唐高僧伝』卷一、拘那羅陀伝の付伝
- ㉚ 『唐高僧伝』卷二、
- ㉛ 『唐高僧伝』卷二、
- ㉜ 『唐高僧伝』卷三、
- ㉝ 註③および『唐高僧伝』卷四、
- ㉞ ㉟ 『宋高僧伝』卷一、義浄伝

- ③⑧ 『宋高僧伝』卷一、金剛智伝
- ③⑨ 『宋高僧伝』卷二、釈智慧伝
- ④⑩ 『宋高僧伝』卷三、菩提流志伝

- ④① 『宋高僧伝』卷三、蓮華伝
- ④② 『宋高僧伝』卷一、不空伝
- ④③ 『宋高僧伝』卷三、

(本学教授 東洋仏教史学)